

日蓮主義統一思想を知らんと欲せば本誌に!

統

◀ 號十五百二第 ▶

◀ 號月二十第 ▶

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地

電話番號 下谷六三一〇番

代金拂込は口座東京一八九番(統一團)

明治三十一年二月二十四日第三種郵便物認可
大正四年十二月十五日發行(毎月一回十五日發行)

統 (號月一十第) 一 號九十四百二第

明三十二年二月二十四日第三種郵便物認可
大正四年十二月十五日發行(毎月一回十五日發行)

謹んで讀者諸賢に告ぐ

不肖儀明治四十三年秋以來、『統一』編輯の任を負ひ聊か文書宣教の聖業に従事致居候處、今回宗門の命に依り地方教界に於て微力を盡すべき事に相成、不日東京の地を出發可致候に就ては、『統一』に關する一切の責任は新發行者に引継ぎ仕り候、茲に多年信行上の交誼を辱ふしたる讀者諸賢に對して謹んで敬意を表し候

- 一、從來の購讀料未拂分は統一團 (振替東京壹貳 壹九番)宛御拂込方相願候
- 一、既に購讀料拂込せられ候分は帳簿に記入し其儘新發行者に引継ぎ責任を負擔可致此儀御承知相願候
- 一、從來販賣致居候各種の書籍は今後不肖宛御用命有之候共御便宜相計り兼候へば必ず新發行人宛御申込相成候様御願候
- 一、不肖の居住地は退て報ずるの機會可有之候

大正四年十一月十五日
「統一」元發行編輯者 三上義徹 恐々

御挨拶

拙者儀十數年前本誌『統一』を編輯致して居りました緣因がありますが、今回又三回目の編輯の任務を帯ぶることになりました、菲才無學到底其任ではありませぬが、同信諸先輩の引立と團員讀者諸君の愛顧に依つて、どうか紙面を整備し過失なからんことを祈つてをさます。但し今回は引継早々の際知らぬところの多いのは平に御海容下さい。

忍水 松尾 鼓城

團員讀者諸君

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 統一團 △發行兼編輯人 松尾英四郎 △印刷人 鈴木日雄

第十二月號 (第二百五十號) 要目

△歲末の辭……………同人

△小戒の迷想を破して我行人を毀譽する者を誡む……………故久城茂太郎遺言

△佛教信仰の體系……………主 幹 本 多 日 生

△靈威耀き神烈尊き我國體……………海軍大將男爵 上村彦之丞

△絶美なる哉無窮なる國體の淵源……………海軍少將 佐藤鐵太郎

△總在一念抄講義 (承前)……………大僧正 本 多 日 生

△日本建國基礎動搖の大問題……………編輯主任 松 尾 鼓 城

▲和歌、短文、俳句、雜報等……………

△課題和歌募集……………御歌所發聲貴族院議員子爵 清岡 長言君選

▲明年一月の本誌を見よ！ 本團同人筆を揃へて執筆せり

歲末の辭

御即位大禮のあるありて、日本國の眞意義に接したる我大正四年の國民は幸福なる哉。而して其榮ある一歳も、幽かに歳の瀨なる晷きを洩しつゝ、今將に暮れなんとせり。亦名残おしき心地もせざらめや。されど白駒の影は繋ぎ留めに由なし、只來るべき新らしき歳に向つて更に希望を有たんのみ。

眞國意に接し是れを味解したる國人は、更に教法の眞意義に透入せざる可らず。國を解して幸福に浴したる我國人が、更に教法の眞味に觸れて幸福を重ねんことは即ち希望の最大美善を全ふする所以なれば也。

小戒の迷想を破して我行人を 毀譽する者を誡む

予曾て二十餘年前神戶にあり、漸く顯本の光教に惠まる。同信牧氏の妻女子に謂つて曰く「我等の宗教は世の倫常を超越したる絶待信仰なり、世論を認むると雖も宗義は人爲に指配さるべからず、且つ我等の指導者たる僧侶は其信仰の正導者なる上に尊む、他宗僧の如き因縁に習はざるをがめず、君今信に入りて日淺し、若我正僧の魚肉を食ふを見て驚くこと勿れ」と、予當時既に其れをあやしまず、而も其老婆心を多としたりき。其後僧に故吉田日梓上人あり曰く「我等は只僧形の似るあるのみ、又一の信徒にして君等と何の異るところなき俗僧赤凡夫なり、只力むるところは専門に教を布かんとするのみにして、同じく佛界に辿りつかんとする迷徒なり、故に云ふところは經文祖句、心には唯信仰のみ、其僧形をなすの故に昔時の清僧の行を強ふるなかれ、我美ぞ明治の真觀上人たり得んや」と呵々一笑さる。我嚴師親下曾て予に教へて曰く「末法の布教者は河渡しの船頭たり得ば幸なり」と、予は是等を思ひ合して大に律戒の變証なるを思ひあたりき。其後岡山柿屋吳本店樓上に龍仁事一師、信徒宇垣卯三郎氏等と共に一龕を享く、主人久城茂太郎氏曰く「予多年信仰に入りて道に盡すの法を知らず、時に偶弘道者に粗勝を罵めて樂しむ、然るに小乘信仰の徒、我信仰の状態を知らず其調語を囁ふ、彼れは隠れていつはり、我は現して信を尊ぶ、然れども予非力にして之れを破するに語なし、君寡くば餘暇を以て我爲に破小戒論を作り、俗僧の輩を警懼して以て予の爲に善根を興へよと、予是れを諾して其機なく、歳月空しく過ぎて其人既に逝き、十五年隔世の感を深くす、會々統一開上に祖文を拜し、是を記題より新にして燕筆を驅る、而して以て久城氏の靈に供ふ

(時に大正四年十一月廿六日朝、有髮沙門松尾英四郎敬白)

▲僧侶といふものが佛教上の名目に現はれた戒を全くせねばならぬものであつたなら、現今一人の僧侶といふものも天下に無い筈である、八萬四千戒、五百戒、二百五十戒、廉くして四十八戒、名ばかり聞いて



もゾットとする。

▲傳教大師が圓頓の戒増を叡山に建立した際、鑑真末等が小乘律義を捨てた時に、所謂ゾットとする諸戒は我日本國には跡を絶つた筈であるが、大正の今日に至つても尙且つ僧侶といふものに人間から飛び離れた戒行が考へられて居るとしたら、なる程大乘の妙味は解らぬ筈である。

▲聖祖曰く「而るに今邪智の持濟法師等昔捨てられし小乘戒を取出して、一戒も持たず、名許り二百五十戒の法師あつて公家武家を誑惑し」とある、聖祖時代に取出すのは未だしもだが、今時塵溜箱から汚に取出して今良觀房を極め込んでも其實は紙一枚の仕事を過ぎない。

▲四條頼基が戒律で威張つて居た良觀上人を「蚊蚋の法師蠅蟻也」と罵つたのを、聖祖は鷲囑摩羅の語を引き、佛譽を引きて、經文分明なれば當然の事だと喝破して居させられる。

▲提謂經といふ爾前經に「五戒は天地の根本、衆靈の源なり、天之神を持ちて陰陽と和し、地之神を持ちて萬物を生ず、萬物の母、萬神の父、大道の元、泥洹の本なり」とある。五戒は即ち持たねばならぬ戒の如くして而も持たねば理由があるから仕方がない。

▲「我國は神國なり」とは神皇正統紀の冒頭に特筆されたる大文字である、我國の聖天子高御座に即き給ふ時には白酒黒酒を以て祖天を祭り給ひ又御身自ら之れを召し給ふ、臣下も萬々歳を祝して之れにならふのである。管に不飲酒戒と云ひ放されては此に戒律と國智との衝突が起るてはないか。

▲この場合に聖祖は隨方毗尼を引いて「少々佛教にたがふとも其國の風俗に違ふべからざるよし佛一の戒を説き給へり」と判じ給ふ、千古の巨眼今更恐れ入らざるを得ぬ。

▲二十七八年戦役の頃、顯本僧故河野日台が弟子山内日櫻を隨へて支那へ從軍布教をして居た、勿論諸宗からも相當名ある僧侶が從軍した。それ等の僧は一列に將官の前に呼ばれた、將官は曰く「諸師は佛律の僧侶である、食事は精進でない困りますか」と、然りと答ふるもの、迷惑相にして答へがたき者。其中に獨り日台は「國家を傾けて戦ふの時、我一乞食僧が、其食の精進たると、獸魚たると、將た梅干たると



素麥粟たるを問ひません」と答へた、將官は我意を得たりとして點頭いたといふとである。(此事山根日東此に顯本の確信がほの見えたと思ふ。)

▲其教義の是非は措く、彼の非僧非俗を以て立つた親鸞上人が、僧俗同行の立場に於て其俗行の總てに下應したのは、威心と云ふよりは實に正直な告白だと思ふ、縦し親鸞上人一人は或は之れを全くしたか知らないが、其以下の其又以下の末輩が何を能く之を持ち得やうか、此に著目して先づ破るものは破り而して其規を示すところは吾輩の夙に敬服して居たところである。

▲高野山が今頃肉食を許したも、禪門に酒の通帳が出入するやうになつたも、其祖師の不明が會々教義の時代に遅れたのを證據立つるばかりは苦しい。

▲五戒は聖祖の認められたところである。然るに自ら不飲酒の一戒は破つておいてになる。不飲酒は五戒の初戒である。其輕きものに從つて、末法の人が持ちがたきところに誑惑し嘘欺するを戒められたものである。

▲「亂れざるを本とする不飲酒戒」聖祖の召したるは其れてあつた「僻事を制する也藥酒をば飲むべし」實に其れてあつた。此語裏には即ち亂るゝものは禁ずべし僻事を仕出かすものは制すべしであつた。二盃酒酒を呑む、三盃酒を呑むを誡め給ふのであつた。一盃酒を飲む敢て苦しからぬではないか。

▲敢て酒と云はない煙草にしても其害の體に及ぶものは禁ずるが好い、五戒と云ふ名目に捉はれて何とする。妄語も亦國家の爲には止を得まい「偽らざるを義となす」上の不妄語戒ではないか「慈を以て義となす不殺生戒」ではないか、軍事に殺生は止を得まい「道理なき殺生を制する也」である、今の歐洲戰亂の野蠻的な殺生(外な)を指すのである「一を殺して萬を生すべきをば許す」國の平和の爲には涙をのんで砲彈をあびせねばならない。人間異性と相寄り夫婦を稱ふ、これが人間の破戒であるか「他人の妻を犯さる戒を不邪淫戒と名く」ではないか。

▲攝善法戒、攝律儀式、これは菩薩に於て始めて云ふべき事である、明治大正の國治の下に生れた宗教家



が何と云ふて此の眞似、ホンの瓜の似さへ出来やうか、但し其處等の今良觀、房は知らない事だ。

▲似をすると云へば僧侶の似の出来るのは「衆生を度し後に自ら成佛せんと欲す」る饒益有情戒、これは今日チラホラとは見當るのである、何とか彼とか云はれながら至誠を聲して正法弘通に力める、然り饒益有情戒を有たんとする眞僧は無いでもない「饒益有情戒を發して此戒を持するが故に、機を見て五逆十惡を造り、同く犯せども此戒は破れず、還て彌々戒體を全ふす」小戒は持てなくても弘道の一は差引勘定して見れば百圓に九十九圓のツリ銭が来る筈である。一回を高しと九十九圓を損ずるを「善惡に拘らず法華經の行者を誹謗することは出来ない」聖祖の誡められたのは其處である「故に瓔珞經に云く犯すとあれども失せず、未來際を盡す故に此戒をば金銀の器に譬ふ」と宜なる哉だ。

▲迹門の戒は爾前の戒に打ち消されて終つた、それでも「而も本門の戒には及ばず」である。本門の戒とは何んだ、壽量品に現れた久成本佛の本尊に南無妙法する形ではないか、三大秘法はそれではないか、受持信念の顯本大信戒の前には「日出て雨下て後の星雲はなにかせん」であらう。

▲今此の末法では根本的眞の大乗戒は妙法の信界に入るところを指すのである「一念三千を識らざる者は佛大慈悲を起して、妙法五字の袋の内に此珠を裏みて、末代幼稚の頭に懸げさしめ玉ふ」この頭にかゝつて居る袋を守るところに絶大戒は存じて居らう「天晴ぬれば地明かなり」て、天晴の一事に地明するてはないか。

▲然るに小戒を持つものが國師であつて眞の大乗戒を薦め又は是れを持てるものを破戒破倫と云ふそんなものが信者らしき顔をして、見榮を飾つて衆人の中で念珠を爪ぐる、それを又喜ぶ當世の法華門徒があつたなら實に云ひやうのない馬鹿々々しきである「剥さへ我慢を發して大乘戒の人を破戒無戒と蔑る、例せば狗犬が獅子を吠へ、彌猴が帝釋を蔑るが如し」聖語眞に針をなすものである。

▲法華聖徒の誇るところは何か、二乗作佛と久成本佛を知るところではないか。青黛珂雪白齒の色欲、絲竹管絃の聲欲、沈檀芳薰の香欲、豬鹿の味欲、櫻かなる女子の皮膚、これ等に恒伽沙劫に着しても菩薩戒



小戒の迷想を破して我行人を毀譽する者を論む

統

六

は破れないが、一念に二乗の心（二乗）を起したなら菩薩戒は破れるとは聖祖の大般若經一句の意譯ではないか、況んや壽量本佛に南無して三秘の妙處（三秘）を歩んで居るもの、一失を罵るものをやである。

▲今頃眞の完全な（小乘）僧侶を求めやうとするのは潮流の迷ひである「清僧の恩を凡僧に報ず」ところに、ホントウの活きた宗教性が耀くのである。若し小乘式に戀着するなら聖祖の教を去つて律に走り、國性に背いた國賊となるが良からう。

▲美しきに裏んで汚がるより、現れて眞實なるものが良い「袋きたなしとて金を捨つる勿れ」とは是れである、蓮華の泥中を離るゝことの出来ぬことを知つた吾人は、人間の弱性を其の儘にして大法界に突入したい。加減乗除を教はつた吾人は止むなく一圓を捨て、九十九圓を取る、腐れた鯛よりも生きた鯛を買ひたい、腐朽しきつた大木は焚火にもならぬが、六尺の棒よく一身を護るに足るではないか況んや大法の宣傳者をや、法華經の弘通者をやである。

▲今や 陛下の稜威耀きます治平に際し、聖祖門下衆が法國冥合を説く時に當つて、國法を犯して尙且つ人を損せんとする者ありとせば、國罰法罰共に免るゝことは出来まい。「若し惡人あつて不善の心を以て一劫の中に於て現に佛前に於て當に佛を毀罵せん其罪尙輕し」嗚呼不善の心を以てして佛を毀罵するも尙罪が輕い、而も「若し人一つの惡言を以て在家出家の法華經を誦する者を毀譽せん、其罪甚だ重し等云云」聖祖は此經文を見給ふて「信心を起し身より汗を流し兩眼より涙を流す事雨の如し」と遊ばされて居る、續いて曰く、我一人此の國に生れて多くの人をして一生の業を造らしむ事を歎く、彼の不輕菩薩を打擲せし人現身に改悔の心を起せしだにも猶ほ罪消え難くして千劫阿鼻地獄に墮す」と、噫。

統

一

十二月號

(第二百五十號)

佛教信仰の體系

(統一閣に於ける講演つゞき)

本多日生講話

三 信仰の分類

第三には信仰の分類のお話をして見たい。是れは一切經に亘つて細かく分類すれば限りもないことであるが、體系の見分け易い様に致しませれば相當に分類の出来ることである。あります多少或るものが缺けて居つても、後から加へれば何處かに這入るのであります、秩序よく是れから是れまでと區切つて入れやうとすると混亂になりますから、區々たる信仰などは何とか處分すればそれで宜いのでございます。この場合に第一に擧ぐべきものは三寶に對する信仰であります。併し就中強く現はれて居るのは佛陀に對する信仰であります。

佛教信仰の體系

其處で先づ釋尊が菩提樹の下で正覺をお開きなされた時の行ひに就いて、釋尊を大先覺者として、サウして佛教徒は皆之を渴仰したに相違ない。釋尊の一言一行に絶對の歸依を持つて居たのである、サウしてその渴仰の熱誠に恰かも子の母を慕ふが如く、誠に其の間に親はしい意味があり、又丁度主従のやうな意味合、又弟子と師匠のやうな意味合ひがあつて、眞に感謝しつゝ仰いで居つたのである。處が其の中心であつた釋迦牟尼佛が沙羅雙樹の下に涅槃されたのが、佛教徒の信仰に對して非常な關係を持つのである。最初は釋尊が菩提樹の下に正覺を開かれたことに依つて大なる關係を生じ而して今度は涅槃された事が非常な關係を生じたのである。釋尊入

七

滅の時には單に人類のみではない、社會のありとあらゆる五十二類が集つて泣いて居ると云ふ状態、其の中には獅子も虎も、蟲蝶までも集つて、悲みの涙に暮れて居ると云ふ位。況してや人間として、殊には釋尊に實地指導を受けたる者に至つては、悲嘆實に遺る瀟々たる状態であつたのである。其の景況は諸經に書いてある通り、非常な刺激を受けたのである。此の涅槃が佛教のあらゆる問題に關係を生じて來たのであります。其處で第一に起つた信仰は佛教歴史の方からお話をいたします。經典の方はいろ／＼混雜して居りますから、史的にお話する方が能く分かります。

(イ) 追慕の信仰

第一に現はれたのは追慕の信仰であります。追慕の信仰は或は追懐の信仰と云ふても宜い。釋尊の此の世に在ますことを思ひ起して、サウして渴仰を辿りましたる信仰。例へば親が亡くなりまして、後とて親の話をして、何時か父が斯う云ふ話をして呉れたとかと云ふ事の話をして追慕の感情を新しくして、其故に渴仰を捧げるのであります。サウ云ふことが強い意味に現はれたのであります。

(ロ) 遺跡の信仰

の續くかぎり、何邊となく山の周圍を回つて、サウして遂に倒れて其處で死んで仕舞ふ。其の後から同はる人は死骸を踏越えては回はり／＼やつて居る、丁度斯んな風なもので、靈地遺跡を崇拜すると云ふ信仰が非常に強められた時代がある。其處に宗教の一種尊い生氣があるのであります。

(ハ) 教法の信仰

又一面には教法の信仰、釋尊の説き給はりし御教へを信ずる。勿論其の中に這入つて理窟を信するにあらずして、經典その物を信する。即ち結集の經典その物を護り、或は之を印度より支那に傳へ、支那より日本に傳へて來たのであります。釋尊の遺教は遂に此の一切經七千餘卷となつて日本の經藏にも收まるやうになつたと云ふのも、此の經典を崇拜する所の精神の力である。其の出發點は何處から來ると云ふことは後にお話します。

(ニ) 法身の信仰

次には法身の信仰と云ひまして、釋尊を追懐するに至り其の佛の身體が出て來る源は何であるか即ち法身である、其の法身の渴仰の精神が進んで行く所に、此の法身の雲の如き中に光りを生ずる。それが此の圖のやうになつて來る。

次に進んで來る思想は遺跡の信仰であります。これは釋尊のお生れになつた所、法をお説きになつたところ、御涅槃になつた所と云ふ風に、御靈地を渴仰して、此の御靈地を通ほして御徳を景慕するのであります。之を四所の道場と稱して誕生の靈地として即ち迦毘羅衛城、御修行成道の靈地として伽耶城、説法の靈地として靈鷲山、涅槃の靈地として沙羅雙林。即ち迦毘羅衛城、伽耶成道、靈鷲山、雙林涅槃、此の四箇の靈地を經營したのである。其の中には伽耶の如きは今日でも十八丈もあるやうな大きな堂が出来て居る、阿育王は八萬四千の塔を建てた。サウして釋尊の遺跡を敬慕仰したのである。其の遺跡の最も簡單なる物は日本にも遺つて居る増上寺などに行つて見ると佛足石と云ふて千輻輪の型のある石がある、此の石を生涯拜んで死んだ人がある、此の佛の御足を拜んで、我が終世は是れて満足であると云ふので、夜が明ければ佛足石を拜み終日拜んで、朝に晩に絶對的に御足を奉じて死んだ人がある。サウ云ふことは一方から考へれば極く局部であり、淺薄であると云ふことになつて來ますが、生きた信仰に於ては此の御足を禮拜すれば終世の満足を得て、一年二年三年十年と御足を拜して終ると云ふに至る、斯う云ふ様な信仰は今でも西藏あたりにはあると聞く。西藏の靈跡參拜は、或る山の周圍をグルリ／＼回つて歩行く、モウ身體



此の雲の中に光りを生ずると大日如來とか阿彌陀如來と云ふ、色の濃くなつて來る所を指して、是れは大日如來である、是れは阿彌陀如來である、と云ふ風になつて、漠々たる法身の尊崇よりして、或は阿彌陀を渴仰する精神に移り、或は大日如來を渴仰する精神に移り、是れが種々の形をなして、或は淨土宗となり或は眞宗となり或は眞言宗となつたのである。茲には大分問題のある所でありますが、此の思想に満足せずして起つて來るのが實在の信仰であります。

(ホ) 實在の信仰

是れが日蓮聖人が生命を以て證明された所の信仰であり、佛教信仰の全體を統一する義になつて來るのである、將來世界のあらゆる宗教に對して、佛教が絶對的優勝の地位を占めるのは此點にあると信じます。已上は皆な佛陀に就いて現はれた信仰であります。而して經法と云ふだけが別の様であります、それも佛を離れては居りません。經典を崇める根本の精神としては、佛を離れて

經を有難かると云ふ者は一人もなかつたのであります。其の他に僧伽の信仰と云ふがある。

(一) 僧伽の信仰

僧伽の信仰とは、素と善智識の信仰である。己れは教在りと雖も其遺經は讀んでも分らぬ、例へば今日貴君方が佛教を認めるには、書物を通して佛を知る、佛の精神を知れば、信仰は如何に頼むべきか、經典の意義は如何に了解すべきかと云ふ、其處が即ち善智識を要するのであります。華嚴經には善智識を求めることが、二卷に渡つて説いてある。善智識を尊敬する場合にも決して佛を捨てるのではないが、佛を渴仰するが爲めに、其佛の教を先覺せる善智識を尋ねて行くのである。佛教徒が善智識を尋ねて佛陀を忘れると云ふが如きは愚の極である、善智識を通して佛の教を信じ而して佛を渴仰するのである。日蓮聖人に於ても佛を尊敬されたことは、實に至れり盡せりであります、若し佛陀を尊崇しないならばそれが明白に外道婆羅門である。凡そ佛經全部を通じて、決してサウ云ふ善智識に流れて佛を忘れべき筋はない。善智識は大切であると云ふことは、法華經の藥王品に「善智識は是れ大因縁なり」と説かれてある。之を通さなければ法ありとも分らないと云ふこと、善智識を通してサウして善

提道に達するのである。親鸞上人にしても阿彌陀如來を信ずるか、七高僧を通ふして善智識として居る。

(二) 善神の信仰

善神の信仰これは前に八相成道のことにて話したことがあるが、釋尊が愈々伽毘置衛城を出らるゝと云ふ場合に於ても、屋外に出て宇宙の光りを見て、非常な清い宗教的精神が發動して、天に居られる神々も地に居られる神々も、我決心を御照覽下さいと誓を立て、サウして城を出られたのである、後には佛陀として其諸天善神をも教へ導くと云ふので、梵天、帝釋等は皆護法の善神又は護世の善神とせられたのである。又此の外に小別しますると神呪の信仰、或は經文の一偈一句を取つての信仰、細かく分けますと問題は澤山ありますが要するに經典に對する信仰を結束する所に妙法蓮華經の五字が要法と稱せらるゝのである。斯くの如くに分裂した信仰を統一する力あるものは何であるかと云へば即ち本佛實在の信仰に於て之が結束せらるゝのであります。其の意見を是れから申述べやうと思ふ。(つゞく)

千早振神の御國に生れ出て

聖の御代にあへるうれしき

文學博士 芳賀 矢一

靈威耀き神烈尊き我が國體

▲大禮に參列して諸外國大使は如何に我儀禮に感動したるか

海軍大將 男爵 上村 彦之丞 (談)

我國體の尊嚴なることは云ふまでもないことであるが、今回の即位御大禮の爲に改めて此の感じを深くした、諸外人の中に於ても、殊に我邦に使用して來て居る人々は我國體の普通でないことは知つて居つても、それでも未だ其れほどに思つて居ない者もあつたであらうが、其れが今回の御大典に參列して全く我大帝國の眞味に觸れたこと、察する。

外國に於ては列強と稱するもので文明國宗教國と稱する國が皆大僧正から帝冠を授かり、爰に初て帝位の確證を得るのである。彼のナポレオン皇帝が獨り僧侶の手より寶冠を奪つて自ら是を冠つたと云ふのは異例である。然るに我邦は然らず畏も我 天皇陛下は天祖大神の神統に在まし、神人一致の上至高御座に着せ給ひ、儼として超越の御位に在します其稜威耀き給ふ神烈の尊さは國の内外を問はず凡そ人として此に蒞み之を聞く者誰か畏敬悃順の念を起さずに居られやうか。(記者曰く、予曾て聞く某大國の即位式に、各國大使參列したり、其集れるものは皆宗教文明國と稱する國の大使

後威耀き神烈尊き我が國體

なり、而して其國は宗教上の儀式なり、而も參集の大使禮をなさず、物議此に起れりと聞く)

諸外國の大禮も皆立派ではあらうが、我國の即位大禮の峻嚴威烈而も神々しきには及びもつくまい。自分は今回の大禮參列諸外國大使は如何なる感想が其進退舉止の上に現れるだらうかと、それとなく氣をつけて見ると、彼の大禮當日の、鉦の合圖にて立ち、太鼓の合圖にて坐る時の如き、彼等は皆肅々整々眞に敬虔なる態度を以て起座した、其態度や誠に立派なものであつた、佛教に靈山に近づく鳥は金色となると聞けり、此神祕的儀禮に列しては即ち諸外國大使も亦襟を正して神標す、國靈國祕 我國の靈光今更乍ら恐れ入るの外はない。我等は武人である、只臣義を本とす、只此君の爲に、此國の爲に既に處決の一身である。乍然何と云ふ幸福で我此國の如き尊い地に生れ來たかを思ふと、感謝の言葉もないのである。(右は某氏の偶談中にありしものを轉記す、若し贅語衍字のあるあらば偏に記者の罪なり、(松尾生))

絶美なる哉無窮なる國體の淵源

▲御大典參列より受けたる峻儼なる感想

海軍少將 佐藤鐵太郎

△口以て語り得べからず

私は此度の御大典に參列するの光榮を得まして、實に「ありがたい」感念が全身に充ちて、一層御奉公の志を篤く致しました。さて其の參列より受けたる感想を語れよと申されますと、その所感に到底口舌を以て能くすべきものでないとも口で談し得る力はない、たゞ有りがたい千載一遇の幸福が沁々と胸臆をめぐるのであると申しあげると外はないのであります。又斯の如き御皇室の御盛事は私として口語り得ざるのみならず、卑しき臣下の身分として之も語るべき性質のものではないかも知れませぬが、しかし折角の御希望でありますから同志諸君に私の語り得る限りに於て嬉しさに堪へないと云ふ氣分だけを談し致します、而して前に申しましたやうな次第ゆゑ談話に順序なく且つ自分の受けたる心持を充分に云ひ現はし得ないのを遺憾と致します。

△開闢以來未曾有の御盛儀

此度の御大典は式微の御關係上、或は千年以上打ち絶えたる典儀の御復興かと存じます。否此度の如き盛大なる御大典は實に開闢以來未曾有の出来ぬものであります。諸外國大使は是れに參列し勃興せる我國民は海の内外にあるを問はず等しく萬歳を唱へ、旭日昇天の氣分天地に充ち満ちたる此の御盛儀は、實に我邦將來の盛運を祝福する未曾有の御大禮と云はねばなりません。

△歡喜して祖先を偲ぶ

我々の祖先は、曾て御舉行遊ばされし過去の御即位に遭遇し、さぞかし歡喜し雀躍したてありませう。而し我々は今生を斯の盛世に享け此度の如き御盛大なる祝典を拜しては何となく祖先の靈前に誇りたいやうな感じが致します。

△あゝ、我は現世の人にはあらじか

今や我國は過去の盛運より更に未來の大盛運を迎へつゝ、榮ある國家の前途に多大の希望を有し、而して此の盛典を祝ひ奉る、此の意義に於て目出度祝盃の底にも深き意味と大なる決心とを掬みつゝ、祖先の靈に謝した様な次第であります。私は臣下として卑しきものであります、然るに多數の人々の中から自分が總代の一人として御盛儀に列しましたのは何と云ふ幸福でありませうか、そとろに感謝の念に堪へないものであります。

△斯の如きにも旺運の天示あり

天皇陛下の皇城御出發の前日は雨であつて、其の御出發の朝も曇つて居りました。然るに當に御出といふ時に忽ち雲の中から旭が出た、そして御立の後には降りました。又京都は御着の時は日光、麗にして御所へ御着の後から再降りだし、降雨はつゞいて九日の晩も降りだし、斯くては儀式の人も困ることも多いであらうと思つて案じて居ましたが、十日の御當日は晴天となり立派な天氣、殊に御儀式の間は日本晴でありました。私は妙なことを云ふやうであります、斯の如きも皆天意に協つたものであつて、皇運國運の旺盛日進の氣運を天示し給ふものであると思ふて頗る快感を覺えました。

△神秘的な金鈴澄聲

私は末輩卑しき身分のものであります、其序列は其次第に従ひまして偶然にも大前の一審近いところにすわることになりました、何と云ふ幸福の事であるか、此の卑しき臣下の身として此の如き場所を拜することやと感謝の心は湧然として起りました。

畏も 陛下には白い御衣、立ち御冠にて御内陣に御入り遊ばす。而して大神のみに種々の御物を差上げます人々の様子を見まするに、奏任の青赤の服を著けたる人は廊下を膝

行の儘、敕任の黒い服を着けたる人は御前に捧ますのでありませす。陛下の御拜の様な皇城の賢所とお變りなく、只御衣が變つて居るばかりだと申します。この御前に供物を捧げまする態を拜し、心は一層引しまりませす。又此時お鈴の音を拜しまして何とも云へない神々しき氣分が致しました。お鈴は賢所も神々しく拜しますが、更に神々しく感じました。承るところに依るに此の金鈴は二十四個ありて長き紐は外陣の處に出て居まして宮中にも老女の尤も重きお役目として引き鳴らすのださうです、お鈴は九十一回鳴る、其時間は相當に長いのでしようが少しも長い感じはなく、誠に神秘的に拜聴し奉りました。其間愼くも陛下には御祭り遊はしませて御下りあり。次に皇后陛下の御代拜次に皇太子殿下の御拜があります。

△堂々たる皇太子殿下の御態度

申しあげるも恐れ多いことではありますが、皇太子殿下其の日の御様子拜し奉れば寔に天稟の御聰明と御威光を拜し將來我神國を御しめす尊き御方として有りがたき事に拜しました。我々の愚なる考にては皇太子殿下いかに聰明の御生れに遊ばすとも未だ齡幼なくませば、さぞかし其日の御儀式の麗はしさに少しは矢大臣等の様などは御覽遊ばすらんと恐

らせたのであります。

△歡天喜地腹の底から生れて

初めての聲

談はあと戻りですが、最も大切の御儀式は十日の午後御即位の儀であります、紫宸殿は古色その儘にしてたふとく、賢所は簡素にして飾なく、我々はこれを拜して何とも云へぬ感じに打たれつゝ、此處にて御式を拜し奉るのであります。私は卑しき身分でござりまするので、御殿内の事は分りませぬ、さて我々共はそれ／＼の席に着きました。恐多くも陛下勅語の御玉聲を拜し、大隈總理大臣の奉讀の聲も終る、大隈伯は萬歳旗の下にて最おごそかに聲高かと、**天皇陛下萬歳**と唱へ奉る、我等は是に従つて一齊に**萬歳**と唱へ奉る、かくする事三回でありました。我々は此時の萬歳の聲は全く腹の底の底から一生懸命に唱へました、勿論總理大臣も生れて初めての力の籠つた聲でありましたらう。斯の三聲の萬歳を叫びまする**刹那の喜び**、**萬歳々々無窮に榮え**ます**御國の御運よ**と心に念じて叫び出したる萬歳の聲、この時の嬉しさ眞に譬へんにも言葉なし、**歡天か喜**地か、沁々と我この盛典に會ひ奉りたる幸福を感謝したのであります。

れながら思ひ居たりしに、何と云ふ美しき事であるか、殿下には、御立派なる態度にて側目だに遊ばさず、静々と、ズツと御通りに相なり拜を終へて御還りになりました。御歳幼くましまして斯く堂々たる御容態を拜し、心中に涙もせきあへず、嗚呼何と申上ぐべき天品の御材ぞやと只管に感じ入るの外はございませんでした。

△神代を偲ぶ御神樂の其夜

翌十一日は賢所神樂の儀があります。是は尤も神秘的であつて、我々の拜聴することは出来ぬのであります。仄に拜承し奉るに、陛下には御神樂の儀を皇祖大神に御奏しになり御座所に御還御になりましても御神樂の始まります時から御濟になりまします時まで御端座の儘であらせらるゝといふ事てあります御神樂の儀は其日の暮方に相なります。陛下の出御も暮がたであります、されば明かに龍顏を拜することは出来ませぬ、お這入になつて御鈴の音を聴くのみであります。お下りになる時は陽は全く暮れて居ります、皇族方其他掛りの方々御隨行あり、御通行は隨に御龍態を拜するのであります次に皇后陛下御代拜を拜するのであります、それが眞暗の處から薄あかりの中に御入なるに御姿は雲を出て雲に入るが如く、その様の如何にも神さびて神々しく、御床しく偲び參

此のよろこびは、外國人も等しく感じたであらうと思ひます、**皇恩乾坤に滿ち德薰海外に及ぶ**、何と云ふ嬉しいことでありましたか。

△三變化に接したる觀想

二條離宮内の賜宴場の雄大にして美しさと紫宸殿の古色蒼然として昔そのまゝの結構、只高御座のみは目もさむるばかりの美しさ、賢所の簡素にして何等の御飾りなき等之等三様の對照は如何に我國性の一面には悠久にして遠き淵源を有すると同時に一面には新らしき潑刺の氣の漲りつゝあることを知ることが出来ると思ひます。斯の如きは當に我等が感歎に堪へぬばかりでなく、參列の榮を得たる諸外國人も等しく賞歎の情に堪へなかつたことだらうと思はれました。

△太平樂と萬歳樂

夜宴に於ける舞樂の太平樂と萬歳樂とは一は勇武にして一は優美、一は戟と劍を抜いて舞ひ莊重にして勇氣盈滿たる有様を顯はし一は袖をかざし極めて優美なる男性的の氣分を顯はして遺憾ないのであります。其の劍を持って舞ふ場合の如きは體のこなしは極めて徐かなものであります。雲の移り行く如くスル／＼と變り行く間に劍の尖先に無限の力と變化とを

込め不動の内に無限の働きを示すのは我々素人の眼にも映じますので全く此の舞の如き見て居て息が出来ぬぐらゐに感じました。又飾り大太鼓の打つ一手、足音の一踏にも心を引立つ強い力があつて、何とも言へぬ味を覺えました。

△力ある國神秘の國大日本

大嘗祭の御式には私は参列致しませぬので拜しませませんが、翌日悠基殿主基殿を拜見致しましたが、柱のくの木、梁の松、何れも皮のまゝに、縁側の材木皮のまゝのは皆杉、床は丸竹を、屋根はかや、垣は萩、總て是等をしつらえるもの釘一本も用ひずして、蔓を以て作りあり、實に氣高いものでありました、殊に恐れ多く承りましたは、陛下の御座は竹を組み敷きし其上に少しばかり畳を敷きたるものださうであります又其御構作の如き世上に流布されて居るものと異なる處甚だ多い様でございます。

私は今回の御大禮に参列して非常に感じたのは其素朴な總ての設けは如何にも我日本の悠久にして其處に神代ながら一貫した神國の力が押しつくる如く胸に迫りましたのを覺えたこととあります。嗚呼我國の神秘的にして而も將來に益々大發展を想像せしめし今度の御大典に卑しき私の如きものが参列の榮を蒙りましたるは一生の面目此上もございませんと思

ひました、諸外國人もさぞかし感心を致したることと存じます。

△先帝陛下の御陵に詣つ

私は御大典に参列して歡喜の念身にあまり、這は是非先帝陛下に御禮を申し上げねばならぬと、十八日園遊會の時間前に桃山にかけつけました。この前は参拜の時は餘りこんなことは感じませぬでしたが、此度は喜悲交に至り殆んど去ること能はざる如く感じまして特に、兩陛下の御陵が御双び遊ばすを拜して、何となく御睦まじく居らせらるゝが如くにて、落涙もとどめあへず、あつく御禮を申しあげて京都にかへりました。

(標題は記者に於いて撰みたる處而して本記校閱を得ず文責在記者、松生)

■手帖の中より

忍水居士

○大正二年一月四日 桃山御陵に詣て奉る、萬感胸を以て我を知らず、只涙の兩頬を傳ふるのみ
○大正二年一月十日未明 戀し奉りし 明治天皇の御神體を拜し奉る、嬉しさ有がたさに涙とどめあへず枕のつめたさに驚けば是南柯の一夢なり

總在一念抄講義 (承前)

▲本講は 大僧正本多日生師 の講述されたるものを速記したるものなり。(記者)

是から本文に入つて御話しますが、

(科段) 一、總標

最初に出て居る。

「釋籤六云總在一念別分色心云云」

是は總標でありまして、此遺文全體の骨子をなして居るのであります。釋籤と云ふのは、天台の書いた法華の玄義を妙樂大師が講釋したものであります、其六の卷に今の言葉が出て居るのである。是は宇宙の本源を説明したもので、佛教の哲理を言現はして居る言葉である。誠に簡單な言葉ではあるけれども、不滅の眞理を道破した名句であります。併し眞に言ふ通り、この哲理は佛教の結論でなくして、佛教の基礎を爲すのである。「總すれば一念に在り」、これは總すればと云ふのは、宇宙の本源を全體にして考へたならば心的一元——心ある一原因に歸着するものである。此一念と云ふのは、思想中の一つの思念でなくして、宇宙的の一大原因を指して居る

のであります、是は即ち唯物論の反對であります。宇宙の全體を總括して一つのものにして考へたならば、生命ある所の絶対である。故にそれを總體から見れば心的一元であるけれども、暫く別けて、相對して考へると云ふと、色心と云ふ二つのものになる。色心と云ふのは色は色質と言ふて、物質である、佛教では色質と云ふ字を使ふが、今て言ふ「物質」と同じである。心と云ふのは……無形にして力あるものでありますから、活ける一つの生命である。そこで一元的に見れば一個の大生命ある一元であるけれども、それを對立的に別けると云ふと、物質と精神の二つに別けることが出来る。是は哲學でも同じ事で、哲學では延長があると云ふ。物の形があるから物質と云ふ事が言へると云ふが、佛教では、物に行き當る 碍と云ふものがある。それが即ち物質である、姿があるから行當ると云ふ。限碍と言へば、限があり 碍がある」と云ふことである。是は唯暫く研究の上に於て別けるから、物質と精神と云ふものに分れるけれども、それを總括して根

原に歸すれば、一個の生命ある大精神に歸着すると云ふ事が、總在一念と云ふ事である。是は哲學上の大問題でありまして、妙樂大師は外の場合にも詳しく講釋して居りますが、それは難かしくなりますから、日蓮聖人は先づ之を問題として説明したのである。

西洋の極く最近の哲學思想は、唯心論とか唯物論とか云ふやうな事柄は變つて、一個の内含的の一元と云ふ事を言ふので詰り一個の力である。萬有の根源は一個の力である。さうして其力に於て目的と云ふものを認めないで、機械的に力が動くならば——例へば雨が降るとか云ふやうに、何の目的もなく、機械的に動いて行くならば、それを物質と言ふのである。即ち物質の勢力と云ふ言葉になつて来る。力を機械的に、目的を主にせずして働くものとして見るならば物質である。若し此力が機械的でなく、何か動いて居ると云ふ事に就て、一個の目的あつて意匠的に働くならば、是は即ち心である。と云ふ事が此頃喧ましい議論になつて、學者が二つに分れて居る。即ち宇宙の動いて居るのは、力と云ふものが機械的に働くのであつて、目的が無いと云ふのが一つの論者であります。一方は、宇宙の力と云ふものは立派な目的を有つて居る、雨が降るのも何でも、一切のものは皆目的を有つて居るものである。目的なしには何物も存して居ないと云ふ事になる。

そこで之を心的内含の一元と稱して、心と云ふものを本に見て、此中に物質を包んで見たのである。表面を心に見て、其内に物質を見る。又物の一元に見る方にして、此中に何か勢力のあるやうに考へて行く、表面を機械的に見るけれども段々やつて行くと、それが一つの目的を生ずる。萬有の本源は機械的と言つても目的を有つて来ると云ふので、今日は唯心論と言はずして物活論と云ふ、物であるけれども生命を有つて居る。心的であるけれども其中に物質的の物を具へて居ると云ふのは、是は同じものである、唯心に様を變へるだけのものであつて、餘程激しい唯物論者でも、矢張り物活論的思想に進む事になつて、さうして新しい意味で宗教が勃興せんとして来たのであり、學說の上に於て宗教的思想を認めるやうになつて居る。是れが此總在一念の思想と同一であると思ふ。今の釋籤の文は巧妙に此二つを續けて論じて居る。總すれば一念に在りと云ふは即ち心の一元、別すれば色心を分つと云ふは即内含性なるを示す。本源を抑へれば一つの生命ある力である、即ち一元と言ふ事は、どうして哲學で許さなければならぬから、總すれば云々と云ふのは一元論である。それであるから總すれば一念に在りと云ふ事は、哲學の極く最近の思想と同一である。此御書はこれより仔細にこの一元的の一念を解釋して行くのであります。

(科段) 二、辯一念

「問云總在一念者其何者耶。」

「問ふて曰く」から以下は先づ最初に一念と云ふ事を辯じたのである、總すれば一念に在りと云ふ言葉は、どう云ふ意味を言現はして居るものであるか。

「答云一偏難思定」

是は中々重大な問題である、所謂哲學の本源を説くのであるから、簡單に斯うだと云ふ事は出来るものでない。

「且一義を存せば」

色々説明の仕方があるけれども、其中で一の例を擧げると。

「衆生最初一念也」

此多勢の者の幾多の生命に分れて現れて居る所の其本源を爲す根本の一念である。最初の一念と云ふのは一切のものが現はれて来る生命の親である。最初と云ふのは今の宗教的の言葉で言へば命の親である、父と云ふ言葉で現はしても良い。吾々の生命の根本を哲學的の言葉で言たら、之を總在一念と謂ふ、唯自分自身の小さな心にある一念を言ふのぢやない。此根本を爲して居る一念を言ふのである。「最初」と言ふ言葉が大事な意味を有つのである。本源とか根本とか云ふ言葉と同一である、吾々の生命の働いて来る根本の一念と云ふ事である。

「心を止めて情按ずるに我等が最初の一念は無没無記と云つて」

吾々の精神を静めて能く考へて見るならば我等の生命の起つて来る所の其本と云ふもの、無没無記——是は攝大乘論に喧ましく研究してあるのでありまして。無没と云ふ事は、絕對の不變的の生命である。此生命が没すると云ふのは、此處にある根本の生命が、下へ落ちて来れば、此處に人と云ふものを作る、初めて別れた精神を作る、没するなしと云ふのは、下へ降りて来ない、現はれない絕對の大精神が其儘で居ると云ふ事が、無没と云ふ事である。無記と云ふのは、即ち善とか悪とか云ふ事になれば、一つの現はれが此處へ起つて来る、そこで善とも悪とも云ふ事の出来ない不善、不悪と云ふものを無記と云ふ、善にもならず、悪にもあらずる所のものであるから、標の附けやうがない、之を無記と云ふ。大生命と云ふものは、善とも悪とも、又是が現れて来るとも云ふ事の出来ない、絕對の平等の生命を指して無没無記と云ふ、詰り眞に言ふ哲學の本源の精神を指して居る、萬有の根本を指すのであるから、そこには何者も差別して現れて居るものはない。

「善にも不悪にも不悪開闢湛湛たる念也」

是は先づ覺らない方から言つたものであるから、開闢湛湛と云ふ言葉で現はしてある。何とも言ひやうがない、即ち周

圓が明るくから物の差別を見られるので、光がなくなつてしまへば、吾々の眼から見れば皆同じである、明るければ青い物もあり、赤い物もあり、高い物もあり、低い物もあるけれども、日が暮れば一切差別は無くなるから、差別のないと云ふ意味を聞くと云ふ言葉で現はしてある、湛々と云ふのは水の湛へて波のない有様である。小さな波も大なる波も立たない、静まり返つて居る水の様なものである。さう云ふ大生命——聞々湛々たる大生命を指して總在一念と云ふのであります。

「是を第八識と云ふ。」
之を第八識と云ふ名前前で言現はす。第八識と云ふ言葉に就てはちよつと、簡単に言ふて置かねと話が分らないが、先づ六識と云ふ事を第一に言ふ、六識と云ふのは、吾々の六根、即ち眼、耳、鼻、舌、身、意の六つの官能に觸れて現はれて来る精神を六識と云ふ、之には六境と云ふものを當嵌めて居ります。色、聲、香、味、觸、法——色に對して眼が觸れ、聲に對して耳が觸れ、香に對して鼻が觸れ、味に對して舌が觸れ、觸覺に對して身が觸れ、物の法則や真理に對して意が觸れ、斯う云ふ六境に對して六識と云ふものが起る、普通の人間の思想、常識と云ふが一般の人間の精神感覺を傳ふて起る精神を六識と云ふ。之を佛教の言葉で迷ひと云ふ、此上へ第七識——末那識と稱して居る、それから第八識——阿賴耶識

それから第九識——菴摩羅識と云ふものを立てる、是は色々翻譯した言葉があるけれども、譯語では言現はせないから梵語の儘で言ひます。末那識と云ふのは後に説明が起つて來ますが、此第八識が動いて、波を生ぜんとする——方へ向いて色々な迷の差別を生ぜんとする、心で動き始める有様を末那識と云ふ、未だ本當の波は起らんけれども動かんとして居る有様である、其前の動搖しない所謂聞々湛々たる所を八識と云ふ。「此第八識は萬法の總體にして諸法總在して備はるが故に是を總在一念と云ふ。」

即ち第八識が動いて善ともなり、惡ともなるのであるから、第八識の中には、諸の法は總て包含されてある。其後に現はれて來る所の九識と云ふのは、眞如と云ふ言葉で現はす。佛道を成就して、第八識以上の佛の悟を得た所である。「但是八識の事の一念也。」

矢張り八識を心で有つて居る、八識の中に在る一つの生命を取れば、それが即ち一切のものを包括して居ると云ふ事を「總すれば一念に在り」と言つたので、是までは一念と言ふ言葉を辨明したのであります。
次に色心と云ふ事を辨明してある、今言ふ物質と精神に分れて出て來る——萬有が色々な形を執つて現はれて居る有様を説明して行くのである。(次續)

日本建國基礎動搖の大問題

▲天照大神の現體を論じて、文學博士白鳥庫吉氏に質す

一、白鳥氏よ私は貴下の門下生の著述を見たる事あり

私は曾て「神代史の新しい研究」？、たしか這んな名題の一書を読んだ。其所論は學究上得たる結果の發表のやうに謂つてあつたが、私は學究ぶつた獨斷的處言の多い論文だと思つたのである。私が此一書を読み了つてそして頭に遺つたものは我建國に對する著者の不正確なる論據を盾としたる不謹慎の態度と、別に云ひ知れぬ不快の念のみであつた。全篇中には有益の文字もあつたであらうが其第一の大切な骨が捻くれ反つて居るので、

日本建國基礎動搖の大問題

斯の如き著書は我國家の爲に有害で無益のものであると酷嘆したのであつた。私には其著者の名を逸して思ひ出せないが、其序文に依つて其著者は貴下の門下生であるを知つて、同時に貴下の所信をも疑つたのである。しかし其著者の告白には貴下との所論が全く一致しないとも述べて居たから一度貴下の名論を承りたいと熱望して居たのだが、田舎にくさぶつて居て其機會を見出し得なかつたのである。

二、予は貴下の日本人種論に對する批評を讀みたり

然るに今回(圖らずも貴下が日本學會に於て講演された「日本人種論に對する批評」といふのを「東亞の光」第拾卷第八號誌上で讀んで、貴下の神代に對する巨眼は、とても「神代史の新しい研究」の著者などの比でない、彼れば徒らに學究を氣取り文字を弄して結局何等社會に與ふるところなきに引換へて、貴下の「日本人種論に對する批評」は屹然として俗論を抜いた明論であつて、且つ學究上尊敬を拂ふべきものと感じたのである。今更貴下の門下生に彼の著のごときものが出たのを遺憾とするのである。私若し少し餘閑を得たならば彼の著を探り出して彼の著より見出したる疑義に對して更めて貴下の教を請ひたいと思つて居る。

三、貴下よ私をして言はしめよ

しかし其れよりも先に、貴下に教を受ければならぬことが出來た。彼の「神代史の新しい研究」にも天照大神が現神で

松尾 誠 城

なりと云ふ事が書いてあつたが、貴下の本批評にも、天照大神を現神でないといふことを明言せられて居られるが、是れは私の只今の考へては、どうしても貴説に従ふことが出来ないものである。こゝに於て敢て貴下に一言を呈するのである。

四、天照大神はアラビトガミ也

「何れの國でも、その國民の信仰の本源となるものは必ずしも現神たるを要しない、例へば西洋のゴットは宇宙の外に在つて目にも見えず、耳にも聞えないが理想的に實在なりと信じられたが故に、これまで多くの人を教はれたではないか」とのお説は一應御尤のやうに聽える。國の本源になるものが必ずしも現體を要せず、宗教的對境が必ずしも現體を要しないかも知れないが、しかし私は現體は理想的抽象的なるよりも認識上勝つて居ると思ふ。而して私は天照大神は古典の上には如何にもハッキリと現體を示されて居るものと見えるのである。現體としてアラビトガミとして見る方が據證が明かに立つと思つて居るのである。

五、何を苦しんで現體でなしとする乎

私は天照大神が果して理想的のものであつたなら其れでも宜しい、理想的と

しても其理想上に現はれた御徳が耀いて居る上に於て我國體に何等尊嚴の滅殺せらるゝものはあるまいと思ふが、しかし事實上、大神の御事跡が顯然として數へ得らるゝにも拘らず、尙且つ首を括りて抽象物ならしめやうとするのは罪のある學究家といふべきである。

六、岩戸の一條と現實

私は天の安河原の出來事、即ち諸神參集會議の一幕、又其以前の大神岩戸がく一條は私には事實としか認められない。其人物の動くところ、其言語の明確なるところ、其の所作の明瞭なるあたり、悉くが現實の状態ではないか、何を苦しんで是をして抽象的に假空的に見る必要があるらうか、若し岩戸の一條が空無のものであつたなら神代に關する遺典は悉くが嘘の夢物語りとなつて終ひはしないか。

七、史實の記録を奈何

天御中主神とか國常立尊とかは現神でないことは異論はないが、正しく現體として其事跡が明瞭に記されて居るのに、是に反對するのは何故であるか、尤も現今のやうに始中終明確なる記録を求めるとは出來ぬが僅に一點の實在上の記録があつたならば、歴史の上に傳説の上には既定である現體を否定する必要はないと思ふ。尤も古典の上には多くの屬性的のものも加つて居るのであるから、理想的に見えるものも記してあらうが、しかし現體として國家の上に史實たるものを是れを「現神であらせられない」と一言の下に抹殺し去らうと云ふのは酷い。

八、構想を爲本としたるを憫む

次に貴下としては意外な言葉を承つたものがある。彼の佛教の「諸行無常の理體、苦集滅道の四諦を眞實と教へた故

に」として、天照大神の現體ならざるも敢て差支へがないやうに申されますが、斯る説は今や佛教では信念把住上甚だしく不便を感じて、其信仰の對境の上には是非とも實體を本源に認めるとに憧れて居るものである、現に日蓮上人は歴史上の釋迦即教理上の釋迦を説かれたのである、其以前の佛學者が理想の上に佛陀を認識して居つたのが、即ち法身報身の尊ばれた所以で、現身釋迦は應身劣等として卑しめられて居たのが、上人に至つて應身に即する三身を説いて其應身の上に總ての力を認め、現體に總てを綜合し歸一せしめて感化上の應用を作られたのである。殊に力ある宗教學者の多くは漸く現體を起本とする教理觀を本爲とする傾向を生じて來て居るではありませんか、その時に、貴下が彼の理體の諸説を引證して、而して天照大神は現體でましまさぬと斷じて、國民の信仰の本源となるものは必ずしも現神たるを要しないと云は

るゝのは私の甚だ遺憾に堪へないのである。

九、理想實在神と其の現體

次に「我國の天照大神は至善至尊の實在である」と信仰せられたが故に、萬世不易の皇室もでき、忠勇義烈の臣民も生れたのである」とある、是はよろしい、しかし是れが理想的に實在でなく、實際現體として實在し、而して其神は至善至尊であつたなら此上もないことではないか。

十、判明せる現體神

古典に於ける天照大神の御事跡は貴下の理想神としては餘りに輪廓が列然として居る。其の御着裝の襟裳など餘りに列然として居る。其の御心の感動なども餘りに判明して居る。其言行なども餘りに判明して居る。是等總て貴下の所謂理想神としては餘りに判然として居るではないか。

十一、本源末流共に現體なり

又現在の御皇室の神統であることを申すには、遠く遡つて天照大神に至らなければならず、而して其本源たる大神が理體であつて、何故其御子孫が實體である

のであるか、天照大神と其御子孫とは一體に現實のものであらねばならぬ。若し天照大神が理體的のものであつて、只獨り御子孫が現出したのなら、其現出の場所其の現出の有様、其の現出の本體は神代の何れに探つたなら宜しいか。

十二、根本確立して枝葉自ら茂る

神の御子孫たる皇室は連綿相續して天壤と與に窮りがないのであるが、而して貴下は「天照大神の御徳は絶えず生きて居た」と云はれるけれど、其本源根本の天照大神が現神でましまさぬのに何處に御徳を認められ得るか、御徳は生きて居ると云つても空想的や理想的では其御徳としては其れは甚だ力弱いものである。根源が現體として判明して居り、従つて其の徳も判明して宏大なる感謝も起るのであるが、元が不明瞭であつて何うして深い尊敬が起りますか。私は此の意味に於て折角にも判明して居る現體神たる

天照大神を何が故に理體神なりと云ふ必要があるのかサツバリ其の理由を認められないのである。

十三、選つて日本國の精神を殺すもの也

私等の宗門の祖先たる日蓮上人が、其以前及び當時に於て法華經の眞精神を認めずして法華經を稱揚するものを指して是れは「還へつて法華經の心を殺すものである」と引證喝破してをられます、貴下は現在の御皇室を尊重し、其現神を天皇なりと申して居られますから日本國の稱揚に當つて居るやうであるが、肝心の本源たる天照大神を夢視し理想し空想しなざるゝことは選つて日本國の精神を殺すものであると私は斷言するのである。

十四、水中の月では仕方がない

「然るに我國では現神は天皇であつて、その御子孫は連綿と相續して、天地と與

に窮りがないから、天照大神の御徳は絶えず生きて居て、時代のふるに從つて擴張せられる。故に儒教が來れば之を包容し、佛教が傳はれば之を融合して益々本來の美德を發揮せられたので、今や正に耶蘇教をも同化し去らうとして居る。我

十五、現體神にあらざる其の證を示せ

「日蓮上人は是等の説を『なほ水中の月を見るが如く根なし萍の波の上になやふに似たり』と申されて居る。私は貴下の如き學者が、一小疑や、一小發見にとらはれて大體に於て現實と信ぜられて居り且つ神代から現實神として力ある傳説を打ち消されるのを甚だ残念だと思ふ。

學者と云ふものは研究的態度とかに於て何を云つても差支のないものであるか

或は左様にも聞いた事もあるやうであるけれども、天照大神の御現體に對する事の如きは、成るべく現體の上に證據を發見すべく盡力すると云ふわけに行かないものでせうか。又假りに理的に見えるものが四分あつても、其現實性の證據が六分あつたなら、是れを四分の説を以て六分の説を打ち消すことは出来ないと思ふ貴下に於て天照大神の從來の現體神の説を打ち消し、及び打消す證據が古典の上に何處にありますか、只理的に見えるところ云ふだけでは否けなす。

十六、傳承説話と信念も亦尊し

私は證據も證據ですが、傳承せる説話と信念も尊重したいのである、餘程の反證があがらなければ傳承説話と信念とを消すに足りないと思ふ、又消す必要を認めないではないか。

十七、敢て貴下の教示を待つ

神代古典は理的に讀まねば解からぬところもあらう、又俗説空語で難つて居るであらう、或る屬性的な行文もあるか知らないが、然し又實際な事實な現存な史實も記されて居る事は謂ふまでもない。私は理的な事にも尊重の念を運ぶが而も理想的にして且つ史實に契る事に於て一層尊重するのである。敢て貴下の教を待つ。(完)

あなとうと

あまつみをや

くにとこたち

すめみなかぬし

あまてる

のかみ

■弘めよ、持てよ、はかれよ

(品川町正法護持會員淺尾清造氏の俗機歌を讀み、此の意を新體標に作りて寄稿す餘白を割愛さるれば幸甚、信末生)

○弘めよたへのみのりを

のりひろまりたる曉

天下萬民一同にみのりの名を唱へなげ

枝ならず

土くれず

世は義に

民け樂に

陛下の仁徳いやがへに耀きまして

うなとに光りましなん

○持てよたへのみのりを

たもてば功徳や大

轉迷解誤

難苦得樂

福不可量

長壽快樂

衆生國土みな佛樂成じなん

○はかれや統一を

亂れにし佛教を妙法の木に

協力一致邪しまなるを伏せ

一天四海妙法に歸せなば

平等の極處

安心の樂境

天下泰平萬々歳

奉祝大法要に大講演會

△其準備 前號所報の如く京都總本山妙滿寺に於て大法要は執行せられたることなるが、關東寺院に於ては御即位記念の祝賀を最も盛大なる儀式の下に舉行するに決し、それ／＼準備員を作り、總務に野口日主、補助に今成日野中村日錦、庶務征川日堂、布教に山根日東、給養に鈴木日雄、接待に關田日城、法要に井村日成、會計に石川顯隆の諸氏各主任として是れに當り、部員には池澤日辰、安藤日莊、森本憲章、三上義敬、木村義明、吉田堅晴、高木木順、鈴木金藏、福原勲次郎、水口安太郎、市川榮吉、寺尾利左衛門、吉田代吉、中田荒吉、細井太郎の諸氏周旋されたれば其準備は至り盡せり。

△各府縣と品川町 さて大法要の當日となれば東京府千葉縣を中心として關東各地より寺院住職の參集するもの數十名にして隨つて檀信徒の來集靈の如くなりければ、其舉行地の品川町に於ても町長を始め、其他の公職を帯びたる人等大に乗り地となり、町民も舉げて敬意を表して景氣たゞならず、又それぞれ役割に充てられたる妙蓮寺本榮寺清光院眞了院等は人を以てうづめられ、町内は豫定のれり供養今や運しと爾前に立ならべる禮品川町未曾有の賑ひなり。

△行列 定期午前十時となれば南馬場本光寺よりは金棒引を先に、宗名旗、萬歳旗三旗に次いで正法護持會員、各寺員總代、朋友會員等各々名旗を立て、俗人

八人は劉胡たる音楽を奏しつゝ種子三十二人は是れに次ぎ、會場たる東品川五丁目妙國寺本堂に到着せり

△會場光景 本法要の爲に天晴會、地明會、正法護持會、佛妙會等の諸會員集り來り、來賓には宮岡中將、細野大佐、小西列事、松本辯護士等諸名士數十名にして、一同着座、大導師には本多大僧正、副として野口今成二權大僧正、田井日光老師中村日錦師等列席し莊嚴なる法要あり、大導師の奉祝文(次號掲載)終りて繞道散華あり、此間講堂立錫の餘地もなき參詣者は多大の法雨に浴しつゝ暫しは讃仰の情に堪へざる様あふれて居たり、洵に近來に見ざる盛儀なり。

△法話 法要は午前十一時より執行され午後に亘りて終りたるが、午後二時より同じく妙國寺に於て法話開會されたり、開會の辭は野口日主師にて、次に海軍少佐佐藤太郎氏御大典參列の所感を述べられ(本誌掲載參讀あれ)最後に本多現下は日本國と法華經の題下に法話あり、聴くもの皆法益の多大なるに頗る満悦の思ひをなし、亞いて宮岡中將閣下はやらら檀上に進み、謹嚴なる態度を以て、天皇陛下の萬歳を三唱し、大衆是れに和して天地も崩れんばかりなり。

△夜間演説 其の日の午後六時開演す、各地よりは紀野後輩、堂亮雄諸師數十名の有志參會ありしが、中にも辯舌を以て知られたる師にして演題に立ちし人を記せば、日蓮主義の修養土屋堅生、新國民の覺悟成島泰行如來道森川寛行、實業の一善齋藤日章起信立行の要旨竹内無著の諸師何れも得意の辯舌は聴者をして増信法浴の念を致さしめしを知る。

△除興 夜間の演説終るや餘興は開かれたり、統一節宇都宮主計介の高弟太郎は現はれて日蓮聖人御傳

記中安房の國妙の浦の一席を演じ、次に津田旭波は元寇の筑前琵琶を奏し、次に獨創橋金吾之助は旭の巻と伊勢大廟の二幕を演じたが、何れも皆熱烈なる信仰より發して信仰増益の爲に處演せる藝術なるを以つて觀者の感動するは尤の事と云ふべし、次に妙國寺の信徒たる雲右衛門の門人桃中軒夢之助の浪花節五郎正宗は滿座をして泣かしめしにき。かくて餘興も終りたれば宗野茂氏は登壇發聲音頭となりて、陛下の萬歳を三唱し一座是れに和する聲は品海の波を動かしたりき。餘興の司會者として關田師の終始意を用ひられし點は皆の満足を表するところなり。

この外に書き洩したるものも多けれど記せば限りなきかも略し、此日萬朝報の夕刊には是れを詳記即報し、又翌日の報知新聞には特筆大書して、池上にも見ざる大盛況なりと報じたるにても其一般を窺ふべきなり。

△統一閣講演會 右の如く品川に於ける法要も芽出度終りたるが、翌三日の大典奉祝大講演會は豫定の淺草區清島町統一閣に開かれにき、午後一時半の刻限來るや、教と國秋葉日慶、我教徒の自覺木村乾中、の二師何れも適切にして能言なる講話あり、續いて國民の自覺本多日主大僧正の高長舌あり、最後に、報恩の精神小林一郎氏の能辯を揮はるゝあり、功妙なる説示の中に多大の感化を興へられて降壇、終りて矢野檢事の發聲にて、陛下の萬歳を三唱し此に本會を全くして閉ぢにき。此に講演會の散布廣告の文句を記して本記事了ることすべし。

○國民は自覺せり…御即位の大典に際會して深刻なる自覺に觸着したる國民は又此大講演會に列して意義

ある獅子吼に徹せざるべからず…

△國民の本分は萬歳の祝酒に酔ふのみかは…

○千古に意義ある即位の大禮

○刻下意義ある此大演説會 諸君來れ…

尙山根日東師は出演せらるゝ善なりしも母堂逝去の爲に急遽郷里に歸せられたれば止みにき

本多管長の雄飛

隨行員萩原啓門氏談

十月には京都より大阪に出て神戸の天晴會に出席し、十一月にも京都より明石地方に飛錫され、歸京されるれば各會の講演會に出席し、席殆ど温る暇もなき管長現下には本月も九日午後四時東京を發して十日午前十一時

新舞鶴に着

吉田海軍大佐の自動車にて迎へらるゝに同乗、水交社に至り將校有志者の懇親席に蒞み、午後海兵團將校及び士官有志に一席の講話を、引續き海軍病院に同じく一場の法話を、夜は水交社に將校並に同夫人の爲に講話を、翌十一日午前には工廠將校の爲に「日蓮主義とは何ぞや」の一席あり、續いて十一時には

工廠男女職工四千五百人

の爲に「信心の養ひ」の題下一場の講話を施さる、此日職工は此の精神修養講話の爲に休揚して法浴せるものなり、午後は同地日蓮宗に所屬せる

日宗會堂に千人餘

の聴衆あり、一場の信仰談を開かる、次いで防備隊兵士の爲に精神上の講話を營みられて、其夜は丹波の鞍部に飛錫一宿、翌朝

篠山の公開會

に實踐會の會に「國民の自覺と日蓮主義」の演説を、翌十三日午前には

軍隊千五百人

の爲に一場の精神講話を、十二時頃後部に歸り、大佐の請に依り

聯隊一千名

の爲に精神講話を、翌朝十四日

福知山將校及夫人

の爲に婦人に關する修養談を、十四日夜は土地の小學校に於て

軍隊二千餘名

の爲に「國民の自覺と日蓮主義」の講話を、夜は一時頃迄來訪法談を請はれ僅かに二三時間の休眠ありて、歸京の途に就かれらるが、其間現下には連日一日數回の大廣長舌に少の謙意の儀も見えず、爲法勇猛精進に訓導是れ力め身心全く弘法の爲に盡さる、十日より十四日に至る布教人数は約一萬三千人の上を越したるなるべし

一乘庵入佛法要

廣島縣加茂郡造賀村には同村井原高源寺に所屬する且乘廿一月ありけるが、高源寺に參詣するには山越にて六里の遠きを行かざるを得ざるを以て、昨冬より協議を重ね精舎を建立するに至る一乘庵即ち之れなり、元來同地は安藝門徒の中間に在つて廿一月の小數の信者なるに斯事ある實に讚歎に堪へざるなり、右は本年一月起工をなし、本月七日を以て三間半に四間の瓦葺本堂を寛事なく工成を遂げたるが此總經費三百七十圓

餘を費し、寄附の人足四百三名なり、比較上實に過分なる努力と金銭とを以て造られたるものにして、全く信仰熱烈の賜なりと云ふべし、されば清淨の堂宇は薫香ゆるやかに入佛の法要を修し餘興として村相撲の催し等ありて晝夜二回の修法及び講演ありたり講師及演題は左の如し

- 七日夜 開堂の辭 世話人總代
- 開眼の旨意 堤 正 音師
- 法華經觀概要 增田智靜師
- 八日晝 正法と信念 堤 正 音師
- 各宗祖の見解 經田智靜師
- 八日夜 時代と流布の經 增田智靜師
- 九日晝 法然上人の見解 增田智靜師
- 系統の教 堤 正 音師
- 九日夜 本佛の慈悲 堤 正 音師
- 女人成佛に就て 增田智靜師
- 閉會の辭 堤 正 音師

右は講演の概況なるも特に報すべきは先年故能仁師明師此の地に法論ありし古跡なれば參詣者孰れも體辨當を用意して遠近より來る様感すべき事なりし尙八日夜講演後、眞宗信者の實議ありて増田師の調誠的答辯あり曉の頃五時間を費して歸正の信者二人を得九日夜同様實議する者ありて三時間に渉る答辯ありしも捨邪歸正の實を示さりしを憾とす、因に世話人の芳名を記

して勞苦を謝す、佐藤信太郎、同郷十郎、同郷太郎、同郷平、同郷一、同郷平、同郷一等の諸氏なりしと云ふ

●顯本青年團奉祝講演會

十一月十日午後一時より統一團に於て顯本青年布教團奉祝講演會を開きたるが聴衆凡そ三百名にして何れも信仰を有する人々らしく何れも殊勝に聴聞せり、講士は吉田堅精、武田顯龍、小西禮道の三氏にして補導として井村日成師の三種の神器に就ての講話あり、三時二十分講演を終り、同三十分一同起立京都高御位に謹面し、井村師の發聲にて萬歳を高く三唱何れも謹祝欣悦の中に再び座に着き、それより餘興に移り、津田旭派の日蓮上人傳の琵琶、木村重治の忠孝一致談の浪花節外講談等にて盛會なりき

●青年團祝賀會

顯本青年會にては同十日午後六時を以て統一團樓上に於て祝賀宴會を催し三四のテーブルスヒトナありて和氣あふるゝ間に散會したり

●統一團主催御會式

十一月廿日午後一時統一團に於て高祖聖人の御會式を謹修す、大導師は統一團總裁本多大僧正にして勤行僧侶數十名なり、參詣者は團員は勿論、天晴會、地明會、講妙會、正法護持會等の會員諸氏約二百數十名は何れも熱烈なる純信仰者にして修法了へ、次て講演に移り本多總裁は、日蓮聖人の臨終と相を説いて吾人信徒は斯の如き偉大なる相に感化を受けざる可らざる

●明石教報

十一月五日午後一時より圓乘寺に於て本多大僧正親下野口總監の臨席を乞ひ御大典奉祝法要を修し、式後講演會を催す

- 開會の辭 川崎英照
- 御大典に就て 野口權大僧正
- 佛敎信仰の體系 本多大僧正親下
- 午後五時より錦江俱樂部に於て三輪郡長荒尾町長及有志、橋香會員等の發起にて本多管長一行歡迎會の宴を張り、午後七時より公會堂に於て大講演會を開く
- 法華經は萬歳經也 川崎布敎師
- 宗教家の本領 神戸新聞記者 岩崎章君
- 日本國は神國也 宗務總監 野口日主師
- 國民道徳と日蓮主義管長 本多大僧正
- 四百五十の聽衆多大の法益を得十時散會せり、十日午後二時より奉祝法要を修し
- 御大典と國民 川崎英照
- 講演後三時三十分萬歳を三唱せり
- 十二日午後七時より圓乘寺に於て婦人會を催し
- 其本分を知れ 中島孝治
- 敬虔の念を養へ 川崎英照
- 二十日午後七時より郡公會堂俱樂部に於て
- 法華經講義 川崎英照
- 二十四日午後七時より藥師寺鈔藏氏宅に橋香會を催し
- 日蓮聖人の傳に就て 小笠原靜
- 御遺文講義 川崎英照
- 二十七日午後七時より錦江俱樂部に日蓮主義研究會發起人會を開き來月より八日十八日の二回づゝ川崎英照師常任講師として開催すと、發起人は高井中將、三壽

主意の妙講あり法益多大なりしが、講演後樓上に於て茶菓並に草餐の供養あり、餘興に午後六時より講演にて音楽會を公開し、滿堂皆其美奏に酔へるが如くに散會す

◎統一團日曜講演

統一團に於ける日曜講演は休止することなく轉法輪をなし來りたるが、成績概して真好なれども尙明年よりは一層廣告に力め團員協力して發展に盡すことになり居れり、十一月及本月の演題及び講師を示さば左の如し

- ▲十一月七日 日蓮主義の敬神 高木木順
- 日蓮上人の至誠 富田真達
- 不滅の靈光 山根日東
- ▲十一月十四日 日本國の魂たる日蓮 牧田英明
- 高御座の意義と法華經 松尾鼓城
- 宗教心の發動 井村日成
- ▲十一月廿一日 佛敎徒の自覺 木村令快
- 佛道修行 木村義明
- 御大典と日蓮主義 關田日城
- ▲十一月廿八日 道は近きにあり 長谷川義一
- 人間最上の要求 柳生正生
- 萬歳と法華經 野口日主
- ▲十二月五日 我が罪か世の罪か 小林教孝

政治家としての日蓮上人 國民の自覺と日蓮主義 本多日生

▲神奈川縣布教概況

十一月十八日午後七時より飯田本興寺に開會 開會の辭 大塚無偏

▲常陸教報

大利根沿岸なる鹿島若松長照寺は本年六月紀野俊耀師就任以來多年荒廢せる心田の開拓と寺門の經營に苦心し着々改善の曙光を見るに至れるが最近の教況を報

▲名古屋教報

郡長北爪署長荒尾町杉山助後小野寺醫學士三輪萬太郎賀川滿陽吉田農學校長、各小學校長及小笠原中島總師寺、岩崎日蓮宗各寺院住職及有志二十餘名なりと二十九日午前十時より明石警察署に於て署員の爲め精神講話を開く

奉祝之意義 因に市內青年會在郷軍人會櫻木敎會各會員の參列多數頗る盛況を呈せり十一月十八日午後七時より市外緒川越境寺に於ては近末寺院住職參列長谷川日清師導師の下に宗祖御會式法要修了つて講演

▲千葉縣通信

十一月十日午前五時より奉祝三光寺に於て百八鐘を撞き八時より國壽修法、午後十時より講演 勤王愛國の門徒 小竹俊雄

其晩村社の庭にて
 大典と國民の用意
 十三日午後、増穂村東光寺に於て
 至誠奉答の秋
 十四日午後、大綱本國寺にて
 尊皇と信仰の調和
 十七日午後、三光寺にて
 張祖御大減と日本國
 十八日午後沼向長福寺にて
 御即位と成佛
 廿八日午後御塚山にて
 聽法と慰老
 廿九日午後中古國三郎氏宅にて
 不老と聞法

東金教信

十一月二十八日千葉縣東金町信行會秋季大會を本漸寺に開く午後一時最盛なる修法をなし左の講演ありたり
 國王の恩 八卷東金高等女學校校長 加藤山 武郡長
 親の恩 加藤東金警察署長 加藤東金警察署長 森川 寛 行
 一切衆生の恩 三寶の恩
 終て東金高等女學校生徒百有餘名の音楽演奏角力劍舞等の餘興あり參拜者堂の内外に溢れたり

千葉縣化道報告

拜啓等々は從來研究會と布教團とを併立して努力し來りしが別立にては總べての點に於て不便を感じ候を以て兩會協議の結果此に研究と布教部とを併合して修養

俳句

題 水 鷗澤四丁先生選

米ひたす小桶の中の薄水
 残月の水にすきて美しくしき
 鼻すりつゝ水れる割籠老翁嘆
 水千里遙々たり遠河帆も見えず
 結水の月湖を渡る狐かな
 薄水つがの鴨がつゝついでる
 額とる祖父母の顔と灯のゆれて水割る音
 小便の泡や流るゝ水かな
 竹藪や沼の水に捨てし船
 寝返るや湖の水破るゝ音
 薄水鶴者は惚れつぱいと思ふ
 共用栓水りて長屋の總出かな
 流水や遊離のウヤンク道迫る
 川邊の薄き水や寒に入る
 漬物桶汲み置いて今朝水りけり
 朝湯歸りの伊達の素足や薄水
 入替旗明日は出るのか薄水

佳作

薄水納豆屋の娘の聲はいゝ
 薄水の涙に旭やかいつむり
 桶なりにほつくり抜けし水散
 薄水とてらのまゝ朝湯へ行く
 エシ〜と手桶凍てつく勝手かな

し努力する事故し申候さて其後の布教報告を致候へば
 一、十一月十八日新治村下吉井光明寺に於て
 精神の記念
 宗祖の人格 山口 育 應
 一、十一月十八日夜永田光昌寺に於て
 宗祖の人格 山口 堅
 功 徳 富田 林 惠
 吾人の目的 吉井 乾 常
 一、十一月廿五日土氣本壽寺に於て
 法華經の真髓 山口 堅
 三大秘法(其一) 吉見 俊 教
 幸福なる生活 富田 林 惠

謹謝

十二月三日までの着の原稿にて、
 京都、姫路、名古屋、千葉其他二
 三の原稿は小生三日大阪にて家具
 取組め中、荷作人誤つて荷作りの
 なかに原稿包を仕舞ひ込み目下運
 送中なること氣附き爲に本月の誌
 上に掲載致しがたく洵に不注意の
 段なれども拙者が取込中の不注意
 平に御海容を祈る
 和歌(課題)三日迄のもの二通あり
 しもの今一應御投稿を得ば幸甚
 編輯局にて 松尾生

秀逸

捨水の流れ其まゝに水けり
 月冴えて手拭の先き水りけり
 裏町や手洗鉢の水投けてあり

天

森かけへ狐火消えて初水

軸

漆の水わざゝこわし見る

題 茶の花

茶の花や拜領の釜の湯の匂ひ
 茶の花や柿の枯木に古草鞋
 茶の花や願叶つて給馬あげよ
 茶の花やシヤンガーニシヤンでハンカチな
 茶の花や高島田が愧しそ手に手をついて
 茶の花に買置の薬切らしけり
 君待つや茶の花香る柴折戸に
 見送りも無き入替の門出花茶哉
 茶の花や今道心の後影
 茶の花や痘瘡神に日の暮るゝ
 茶の花や扇りし蜘蛛が床をばふ
 茶の花や管舎の跡に馬の糞
 茶の花や鼻流を垂した角兵衛獅子
 茶の花や空果れらびが多くなる

佳作

茶の花や小鳥をねらふ空氣銃
 茶の花や演習の砲聲が聞こえる
 茶の花や御陵へ一里京へ二里
 茶の花や尼僧に古寺の傳説をかきされる
 茶の花や切髪若き未亡人
 椿火から先づ愛嬌の出花かな
 むしろ座のゐる椿火に興つきず
 椿煙る嶺山小屋の薄灯り
 椿火には未だ嘗て経験なき身にて候
 新緑の茶屋は草葎椿煙る
 椿煙りをさけて思はず手にさわる
 椿の火におじやぐつゝ野良歸り
 父の故郷椿火で字の馳走かな
 眠より馬顔を出して居眠る椿火哉

秀逸

茶の花や小鳥をねらふ空氣銃
 茶の花や演習の砲聲が聞こえる
 茶の花や御陵へ一里京へ二里
 茶の花や尼僧に古寺の傳説をかきされる
 茶の花や切髪若き未亡人

天

椿火から先づ愛嬌の出花かな

軸

椿煙る嶺山小屋の薄灯り
 椿火には未だ嘗て経験なき身にて候
 新緑の茶屋は草葎椿煙る
 椿煙りをさけて思はず手にさわる
 椿の火におじやぐつゝ野良歸り
 父の故郷椿火で字の馳走かな
 眠より馬顔を出して居眠る椿火哉

佳作

椿煙る嶺山小屋の薄灯り
 椿火には未だ嘗て経験なき身にて候
 新緑の茶屋は草葎椿煙る
 椿煙りをさけて思はず手にさわる
 椿の火におじやぐつゝ野良歸り
 父の故郷椿火で字の馳走かな
 眠より馬顔を出して居眠る椿火哉

都育ちの我には椿が面白き
 筑波おろし雨戸を打つや椿煙る
 椿の火や山窩に混るばて委
 對陣や穴居の椿火ほの赤き
 村人の噂とりんゝ椿火かな
 風の夜を車大工の椿火かな
 ケンチンに歸休懐ふ椿火かな

佳作

椿焚くや手製の濁酒の酔ひ心地
 椿焚いて去年の戦の物語り
 椿焚いて昔囃しの夜はふけぬ
 山家には珍らしき娘椿もゆる
 酒かほる椿火に友の笑顔かな
 椿の火に古老の話さく夜かな
 ほだたくや捨てし都の戀かな
 木綿賣りの菓香を乾す椿火かな
 灯ともせばぼんやり黒し椿の煤
 猪狩の功名ばなし椿火かな
 大鍋や椿火に煮たつ猪の肉
 椿る柴折焚きてさあおふんこみなせい

母の喪中に付歳末年首の禮
 を缺く 淺草慶印寺
 大正四年臘月 山根日東

妙滿寺靈寶陳列目錄(續)

- 一日淵上人略述大藏經
- 一日什正師真筆置文誦誦文
願本法華宗創立唯一の重寶なり
- 一朝鮮王子の真筆一遍首題
清正公の同行せし朝鮮の王子にして後日遙と號し給ひしなり
- 一清正公朝鮮征伐題目の旗
四八の大曼多羅と稱す
- 一日經上人本尊
- 一安土宗論實記
- ▲御宸翰之部
 - 一後小松院御宸翰
 - 一同 團扇面和歌
 - 一後陽成院御宸翰
 - 一同 扇面和歌
 - 一後柏原院御宸翰
 - 一陽光院御宸翰
陽光院御誦誠仁人皇百七代正親町帝の皇子百八代後陽成帝の御父君也天正十四年七月二十四日薨去號陽光院太上天皇
 - 一靈鑑寺宮筆
 - ▲名筆書幅之部
 - 一深草元政上人筆
 - 一光悅筆
 - 一古筆年鑑
 - 一盧堂墨蹟

- 一宋梵竺僊筆
- 一源氏女筆
- 一傳教大師真筆圓頓章
- 一懷紙二十枚繼 (親王堂上方筆)
- 一乾坤屈の額朝鮮人書
- ▲名畫幅之部
 - 一清正公御影 (土佐光明筆)
 - 右極め
 - 一古法眼元信畫
 - 一段月畫
 - 一松花堂筆
 - 一曾我蕭白の屏風 一双
 - 一本因坊肖像 (自設)
 - 一日淵上人像 (自設)
 - 一土佐光高畫二卷 (歌は堂上人の筆)
- ▲支那名畫之部
 - 一支那畫涅槃像
 - 一嚴王品說相圖 (支那名畫工合作)
 - 一宋山村畫
 - 一元超雁畫
 - 一唐畫波に鶴 (筆者未詳)
 - 一元海涯畫
 - 一萬木畫
 - 一子昂畫

一明畫文珠龍王異 三幅

- ▲彫刻並に器具之部
 - 一人丸木像 (佛師定期作)
 - 同添狀等あり
 - 一樓門造象牙彫刻天人像
極密の彫刻にして日本品に非ず
 - 一青磁花生 (珍品)
 - 一十一俵大黒天 (傳云傳教大師の作當寺開山日什正師叡山より持來られし像)
 - 一日經上人並に門弟の木像
慶長年間の佛門の傑僧の像にして木像にも迫害の刀痕を蒙れり
 - 一元政上人の愛石築波山
 - 一本因坊の基盤
近衛公の贈り給ふ器にして唐桑なり石は支那燒
 - 一日什大正師の念珠並に袈裟七條
 - 一日經上人の法衣並に念珠
 - 一道成寺の鐘
文武天皇勅願所云々と銘あり
- 一講堂前の井戸は中川の氷京都七名水の
一にして清水なり常に何れにか流れ出
づるの模様なり
- 本日は特に此の名水を汲み取りて點
茶の用に供す
- この頃は流るる水をせき止めて
木蔭すしし中川の宿
太上天皇
- 日蓮門下學生大會 其他雜報次號

次回課題

- 和歌
- ▲梅
富内省御歌所賞院議員
子爵 清岡長言君選
- 俳句
- ▲鶯
本誌編輯部選

- 締切 一月十五日
- 發表 本誌二月號
- 天賞 粗品進呈
- 三客 本誌一部送呈

投稿規定

- 一用紙 葉書又は半紙半切
- 一書方 壹題三首又は三句限り字體明瞭に認め一課題毎に別の紙を用ひ一枚毎に必ず住所姓名を記すべし
- 一宛名 東京市淺草區清島町十四番地
- 統一團編輯部投稿係

茶教授會開始

茶の湯と生花の教授を統一團社會部の一事業として統一團内に始めます

□日時 一月より毎土曜午後一時より投入盛花

□抹茶は千家表流(日時未定)

會主 松尾 鼓城
教員 芹田 女史

投入盛花は當今流儀以外の花として上流社會に流行せるものなるが、會主尙是れに工夫を加へたるものにて本教授に依りて花道の故實、禮儀、裝飾を併せ學び得べし、希望者は至急申込ありたし

松尾 鼓城、小林 鷺洲 共著

投入盛花全

數日の中に東京
發賣本閣にて取
次すべし

年賀廣告料金廣告

大正五年は統一の生れて二十年目に相當し、號數亦二百五十一に達し洵に芽出度年であります。此際御即位式翌新年の本誌に年賀廣告をなさるのほ何だか意味があるやうです、讀者諸君大に祝賀の廣告をなされんことを希望す

廣告料金は
五號活字十八字詰一行金拾五錢の割

注意	廣告料		定價	
	別	特	共	郵
●購讀料は一切前金の事●郵券代用は一割増の事●送金は振替貯金口座東京壹貳壹九番を利用なされば最便利なり但し此場合は手数料金一錢御負擔の事●領收證は特に御請求ある場合の他は本誌の發送を以て之に代用す●廣告に關する件は本閣へ直接御交渉の事●本閣への御照會は返信料付にあらざれば回答せざる事あるべし●廣告原稿締切毎月末日	通	常	共	郵
	半	壹	一	一
	頁	頁	冊	冊
	金 八 圓	金 拾 五 圓	金 九 拾 六 錢	金 八 錢
	別	壹	一	一
	頁	頁	冊	冊
	金 參 拾 圓	金 貳 拾 圓	金 四 拾 八 錢	金 八 錢

大正四年十二月十五日印刷 (第二百五十號)
大正四年十二月十五日發行

東京市淺草區北清島町十四番地
編輯 松尾 英四郎
印刷 鈴木 日雄
印刷所 三秀會

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地
電話番號下谷六三一〇番
振替貯金口座東京二二九九番

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可 大正四年十二月十五日發行(毎月一回十五日發行)

新 手 本 誌 方 子

今回新たに本誌を御送附申しあげましたのは豫て法華經研究御熱心、又は日蓮主義者と承り、又は同人中の知人の縁故を以て爾來本誌の御購讀を御依頼申しあげ次第です、主義の宣傳に御翼賛の上本號より御購讀を祈ります。

◎代金の義 前金御送附下さるに越したことはありませんが、御都合に依り三ヶ月目、又は六ヶ月目ぐらゐに當方より募集郵便を差上げます(集金郵便とは御存じの通り郵便配達夫が當方の代理にて集金に參るのです)。次に若し購讀御不用の御方は御面倒ながら雜誌御返送を頂ければ購讀無之ものとして次號から送りません。若し事なくば御送附御承諾と存じまして引續き御送附申しあげます。

統一團雜誌部

讀者諸君

(代金御請求に就て)

前金でない讀者の方で、數ヶ月購讀料の滞つて居る御方へ近々
集金郵便を以て代價御依頼
申しあげます。御遠方の方々は代金御送附まで御待ち申しあげるのが禮ですが、年末は御存じの通り帳簿の整理も必要でございますし、且つ僅かの金御送附の手續も御面倒だらうと察しまして、甚だ失禮ながら郵便配達の方に御依頼集金に參上致します。此方法は集金上最も文明的の方法でありますので善意に御解釋の上御拂込をお頼み申します。地方に依りては郵便配達夫がイバリ返つた口上で集金を致すので不快を感ぜらるゝ方もあるさうですが、是れは文明の一弊害として御容赦下さい。尙多數中違算もございました場合は其旨葉書にて御知らせ下さい。葉書代は當方で御支辨致します。

本誌會計部

本 要 目

- ▲課題 和 歌……御歌所請項 子爵 清岡長言君選
- ▲新年卷頭の辭……………本團同人
- ▲日蓮聖人終生一貫の主張……………本多日生
- ▲日本は神國なり……………樺大僧正 野口 日主
- ▲岩野直英氏のドック大乘說法場論……………
- ▲清水龍山師の宗教に關する書簡……(是血是淚)
- ▲眞修養在眞信仰……………法學士 小西 眞雄
- ▲說教師復活論……………本山部長 萩原 啓門
- ▲問法の師に謝恩の意を……………金光 孝碩
- ▲吾宗の信心……(說教)……………秋葉 純一
- ▲各地教信……………漢詩……………和歌……………俳句
- 次號豫告
- ▲思恩教林に於ける講演……………佐々木 照山
- ▲白鳥博士對松尾鼓城議論評……………長谷川 六合

(第二百五十一號)